

平成30年度北海道大学大学院

文学研究科修士課程入学試験問題（前期）

試験区分	<input checked="" type="checkbox"/> 一般入試 <input checked="" type="checkbox"/> 外国人留学生特別入試
試験科目名	<input checked="" type="checkbox"/> 専門試験（ 日本文化論 ） <input type="checkbox"/> 共通外国語（ ）
出題の意図	<p>問題は計三問で、本専修での学修に不可欠な能力・知識を多角的に量ることを意図したものである。</p> <p>問一は、主として日本古典文学史に関わる学術的文章の読解力・批評力・論述能力を、問二は、古典の文章の基礎的解釈力とあわせて、変体仮名の理解度をも同時に試す問題。また、問三は、日本古典文学を研究する上で必要となる漢文の解釈力をみる問題である。</p>

平成30年度  
北海道大学大学院文学研究科修士課程入学試験問題（前期）  
（専門試験） 日本文化論 全3枚のうち1枚目

この試験では、試験問題 3枚、解答用紙 3枚を配付する。  
問題は三題あり、解答は問題一・二・三についてそれぞれ別の解答用紙を用いること。

---

## 問題一

次の文章は、ドナルド・キーン著『日本文学史 近世篇二』（徳岡孝夫訳）の一節である。  
読んで学術的見地から自由に論評せよ。

- \* 問題本文は著作権法上の理由からこのホームページに掲載することはできませんので、下記の出典箇所を参照するか、文学研究科教務担当の窓口で閲覧してください。

ドナルド・キーン著『日本文学史 近世篇二』（徳岡孝夫訳）、  
（中公文庫、2011年3月、183頁～184頁）

## 問題二

次の文章は『好色五人女』巻二「情を入し樽屋物がたり」の一節である。読んで設問に答えよ。

されば一切の女移り気なる物にして、うまき色咄しに現をぬかし、道頓堀の作り狂言をまことに見なし、いづともなく心をみだし、天王寺の桜の散前、藤のたなのさかりに、うるはしき男にうかれ、かへりては一代やしなふ男を嫌ひぬ。是ほど無理なる事なし。それより万の始末心を捨て、大焼する籠をみず、塩が水になるやら、いらぬ所に油火をともしもかまはず、身代らすくなりて、暇の明を待かねける。

死別ては七日も立ぬに後夫をもとめ、さらされては五度七度の縁づき、さりとは口惜き下々の心底なり。上々にはかりにもなき事ぞかし。女の一生にひとりの男に身をまかせ、さばりあれば御若年にして、河州の道明寺、南都の法花寺にて出家をとげらるゝ事も有しに、なんぞかくし男をする女、うき世にあまたあれ共、男も名の立事を悲しみ、沙汰なしに里へ歸し、あるひは見付て、さもしくも金銀の欲にふけて、あつかひにして済し、手ぬるく命をたすくるがゆへに、此事のやみがたし。世に神有、むくひあり、隠してもしるべし。人おそるべき此道なり。

問一 傍線部①・ハをそれぞれ現代語訳せよ。

問二 傍線部イ「それより万の始末心を捨て」とあるが、なぜそのようにするのか。その最も大きな理由を本文に即して答えよ。

問三 本文中のくずし字の箇所を原文通りに翻字せよ。

問四 傍線部ニ「さもしくも金銀の欲にふけて、あつかひにして済し」とあるが、具体的にどのようにするのか分かりやすく説明せよ。

問五 右文献に関連する文学史的意義について自由に述べよ。

## 問題三

次の文章は唐の太宗撰『帝範』の一節である。読んで設問に答えよ。

夫食為人天、農為政本。倉廩實則知礼節、<sup>A</sup>衣食乏則忘廉耻。故躬耕東郊敬授民時。国無九歲之儲不足備水旱、家無一年之服不足禦寒温。然而莫不帶犢佩牛、棄堅就偽、求伎巧之利、廢農桑之基。<sup>B</sup>以一人耕而百人食、其為害也、甚於秋螟。<sup>C</sup>莫若禁絶浮華、勸課耕織。<sup>D</sup>使民還其本、俗反其真、則競懷仁義之心、永絶貧殘之路。此務農之本也。

注 授時 ふさわしい時を教える。

犢 仔牛。

問一 傍線部 A・C を平仮名のみで書き下し文に改めよ。

問二 傍線部 B という事態に至る原因を説明せよ。

問三 傍線部 D をわかりやすく訳せ。